◎石川県輪島港発▼輪島沖
記録級のヒラマサが浮上！
輪島沖のルアー青物快釣

本誌編集部／黒澤尚人 Naoto Kurosawa

▲輪島沖は大型のヒラマサやブリと出会える確率の高い魅力的なフィールド

10月28日、輪島沖でヒラマサやガンド（関東でいうところのワラサ）がルアーで好調に釣れているとの情報を聞きつけ、東京から片道500キロ先の石川県輪島港の漁生丸へと向かった。

漁生丸では周年ルアー青物船を出しておりジギングとキャスティングで狙えるが、9月の終わりから12月にかけて輪島沖にあるメインポイントの七ツ島周辺をヒラマサやブリがまとまって回遊し、ジギングで10キロ級を筆頭に数釣りを楽しめる絶好のシーズンとか。

また当地で釣れるブリは同じ能登半島の氷見漁港で水揚げされる「寒ブリ」とほぼ同じ質の魚ということから、食味と釣り味両方を求めて遠方から訪れるファンも多い。

当日はマシーン山崎こと山崎崇行さんとご一緒したが、ヴァンフック、ハヤブサなどのフィールドテスターを務め、様ざまなルアー釣りをこよなく愛するマシーンさんも輪島沖のルアー青物に魅せられた一人である。

今回は自家用車で関越道→上信越道→北陸道→能越道を経由し輪島港へと向かったが、前日の15時半に出発して、到着したのは午前0時を過ぎていた。ちなみに関東から輪島港までは羽田から一日2便運行されている飛行機でのと里山空港まで行きレンタカーなどを使うか、北陸新幹線で新高岡駅まで向かい同じくレンタカーを利用すると移動時間を短縮することも可能だ。

早朝から青物乱舞

しばしの休息を取り終え3時半になると、この日乗船予定の方たちが港の駐車場へとやってきた。

あいさつを済ませ、全員の準備が整った4時半にまだ薄暗い輪島港を出船。1時間ほど走りポイントとなる七ツ島周辺海域へとやってきた。

「どうぞ～。水深57メートルです」と船長から開始のアナウンスが流れスタート。ボートムまでジグを落としワンピッチジャークで探っていく。

七ツ島周辺の今シーズンの模様を船長に伺うと、

「今年は例年よりはブリもヒラマサもよく釣れとるね～。サイズは日によってバラバラだけど、出船すれば型は間違いなく見られるよ」とのことで期待に胸が膨らむ。

魚群探知機の画面を見せていただくと、ベイトとなる小魚の反応とともにチラホラ青物らしい反応が映し出されている。

船長と話していると右舷トモで釣っていたマシーンさんにヒット。青物らしい引きだがあまり重量感もなく浮いてきた。

上がってきたのは当地では珍しいショゴ（カンパチの若魚）。マシーンさんもこの海域でショゴを釣った経験はほとんどないようだが、地球温暖化による海水温の上昇が関係しているのだろうか？

ヒットルアーや狙い方についてマシーンさんに聞くと、

「朝イチは魚の活性を判断する意味で175グラムのショートタイプのジグを使いました。色はシルバーグローを使ったんですけど、状況が変わったら色いろ試してみようと思います」と話してくれた。

なるほどなぁと思いながらメモを整理していると再びマシーンさんにヒット。力強い引きを見せながら上がってきたのはガンドだった。

これでスイッチが入ったのか右舷ミヨシの船場弘恭さん、われわれと同行して来た新井恵美子さんにそれぞれガンドがヒット。さらに左舷ミヨシでスロージギングをしていた斉藤良典さんは良型のマハタを釣り上げ船内は少しずつ盛り上がり始めた。

知っ得！ Tips and Tricks 体力消費を抑える電動ジギング！

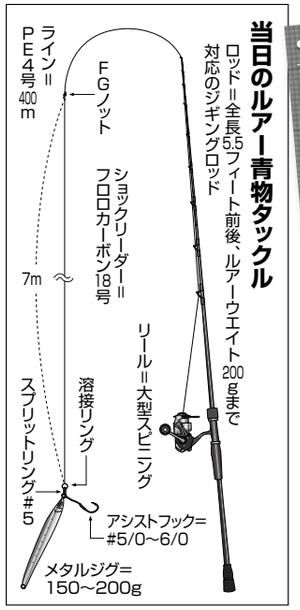
メインとなるメタルジグの重さは170グラム前後。ワンピッチジャークで半日近く巻き続けるのはかなりきつく、誘いも雑になりがち。慣れていない人こそ電動ジギングがおすすめだ。中速で竿をジャーキングするだけで十分な誘いになるし、ヤリトリもスムーズに行えるので体力消費はグッと抑えられるだろう。

◀電動ジギングなら女性でも釣りやすい

•Tackle Guide

カラーページで紹介したスピニングタックルでのジギングのほかに、漁生丸ではスロージギングをすることも可能だ。6フィート半前後でルアーウエイト300グラムまでの対応のスロージギング専用ロッドにPE3号300メートル、リーダーはフロロカーボン16号の強めのセッティングが望ましい。

当日のルアー青物タックル



特大ヒラマサがヒット

その後もポツリポツリとガンドや3キロ前後のヒラマサがヒット。そろそろビッグワンを拝めたらいいなぁなんて思っていた9時ちょっと前、電動ジギングをしていた新井さんの竿が強烈に曲がった。

またたく間に130メートル以上ラインが出され、電動リールが悲鳴を上げている。

あまりの引きにマシーンさんがすぐにサポートへ回る。竿を支えながら「これヒラマサだよ！　しかも相当デカいよ！」とマシーンさん。

巻いては糸が出され、また巻いては糸が出されと繰り返しながらも魚は少しずつだが浮いてきた。

15分ほどのファイトの末ようやく魚体が見えてきた。デカい。

船長とマシーンさんの二人がかりでタモ入れしようやく船内に取り込まれたその魚体は後検量26キロ、130センチオーバーのヒラマサだった。

乗船者の皆さんの歓声が沸き上がり、船長とマシーンさん、そして釣り上げた新井さんには安堵の表情が浮かぶ。

私は私で興奮が冷めやらず。

なにせ釣り番組で見たニュージーランドのキングフィッシュ（ヒラマサ）の特集でしか今まで見たことのない特大サイズのヒラマサが、たった今私の目の前に横たわっているのだ。

撮影も落ち着き改めてヒットした際の状況を新井さんに伺うと、

「マシーンさんのアドバイスを聞いて、メタルジグが大きくヒラを打つようにするためジャークの幅を大きくしてみたんです。試した直後にいきなりドンッ！　ときたのでビックリしました。釣ったのは私ですけどほとんどマシーンさんのおかげですよ」と謙遜のご様子。ヒットルアーはマシーンさんと同様175グラムのショートタイプのメタルジグでカラーはピンクシルバーだった。

そして10時半ごろ、マシーンさんにもこれまでよりも強い引きの魚がヒット。根に突っ込まれないよう強引に巻き上げてくると、上がってきたのは10キロ近いヒラマサ。

本来であれば10キロ級のヒラマサもなかなか上がるものではないのだが、先ほどの26キロのヒラマサを見たあとのマシーンさんはどうも腑に落ちない様子だった。

11時を過ぎると魚群探知機に反応は出ているのだが潮が動かないようで、アタリがピタッと止まってしまう。

12時ごろにボロッポロッとガンドとマハタが上がったものの、その後は大きな盛り上がりはなく13時半ごろに沖揚がりとなった。

釣果は26キロのヒラマサを筆頭にガンド、ショゴを一人1～10本、マハタも交じった。船長はもう少し数がのびたらよかったんだけどねぇと話していたが、輪島沖のポテンシャルを十二分に感じられた釣行だった。

また、船長の話では4～6月ごろにかけての春シーズンも良型のマダイが交じって楽しい時期とのこと。

「遠いだろうけどまた来てな」と船長とおかみさんに温かく見送っていただき、能登半島輪島港を後にした。

▲マハタは輪島沖の定番ゲストだ

▼魚が掛かったらとにかくゴリ巻き

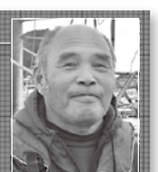
◉船宿information

石川県輪島港

漁生丸

☎090・3766・2673

（詳細は巻末の情報欄参照）


山中 修身船長

▶料金＝ルアー青物乗合一人1万5000円（氷付き）
▶備考＝予約乗合、4時半出船。（詳細は電話確認）